

高校生の文章表現

小林 美恵子

筆者は都立高校の国語教師である。一高校の限られた範囲ではあるが、授業やホームルームなどの日常活動の中で見る生徒たちの文章を通して、現代の高校生に見られる文章表現に対する意識や能力について考えてみたい。もちろん、現代の高校生とはいっても、そこにはさまざまな個性や能力があり、ひとまとめでして論じるのは乱暴との見方もあるだろう。小論はあくまでも、筆者の周辺の高校生の文章に関する印象批評としてお読みいただきたい。

現代の高校生、というより現代人一般の傾向として「読まない」「書かない」ということはよく言われるように思う。「読む」ことに関して言えば、高校生たちを感じるの読む量の減少よりは、むしろ読むものの質の変化である。彼らに人気のある作家といえば、まず、赤川次郎、新井素子あたりだろうか。外国の現代SFなども好まれているようで、これらの作品についていえばかなり読みこんでいる生徒もいる。一方、夏目漱石や芥川龍之助などは名前知っているものの、教科書に採録されることの多い「ころ」¹「羅生門」²「鼻」³等の他の作品を読んでいる生徒はきわめて少ない。筆者は、ここ何年か3年生の現代文で「舞姫」⁴「火垂るの墓」⁵を教材としてきたが、有名⁶な森鷗外は無論のこと、教師から見れば、現代の大衆的な作家である野坂昭如でさえも、今の生徒たちには、タレント、政治家としてはともかく小説家としてはほとんどその名を知られていない。さらに小説作品以外、評論などを教材として扱うことになると、大げさに言えば実際に読みはじめる前から、生徒のアクビや居眠りとの格闘がはじまるという感じだ。総じて、彼らは娯楽性の強いもの、物語性のあるものを好む傾向が強く、一冊を2度3度とくりかえして読み、そこから自分の生き方への影響を受けるというような読み方はあまりしないように見受けられる。この傾向は現代の出版物の氾濫と無関係ではないだろう。また書物以外のマスコミなどの刺激も無視できない。それらに幼い頃からとりかまれて育つ中で、読書好きで手当たり次第に読むという傾向の強い子ほど、軽い読書、娯楽としてのみの読書になじんでいってしまうのではないかと感じずにはいられない。

さて、次に「書く」ということについてだが、これも全体的に「読む」とこと

同じような傾向を示していると言ってよいだろう。よく言われることだが、電話の普及が手紙を書く機会を減らしている。時候の挨拶、戴き物のお礼などを、つい電話で済ませてしまうのは若者に限ったことではない。若者に関して言えばラブレターなどというものの、今や昔語りの感もあるようだ。とはいえ、「書く者」が全然いないわけではない。筆者の時代——20年前の高校生がそうだったように、今も、授業時間中に教科書の下にかくして手紙を書いたり、交換日記様のものにぎっしりと細かい字を埋めている女生徒がいる。また文筆家志望(?)の生徒もあり、校内で毎年行われている創作コンクールには、数はそう多くはないが、よい作品も集まってくる。特にSF風のもの、ショート・ショート風の作品などに教師にはとても及ばぬような良質の感性をたたえたものが見られる。ところで、これらの創作文の多くに見られるのは、手紙や交換日記の文章がそうであるように、あらたまって文章を書こうという気負いの風をあえて廃した語り物調の文体である。(例1)

(例1 日野高校 61年度
創作文芸コンクール文集収録作品より 高3男子)

僕は中山速人という。僕には友達がいる。そりゃあ、友達なんて、たくさんいるが、僕が言いたいのは、一番、仲のいい友達の事だ。その友達の名前は、新見光雅、新見は古ぼけたアパートに住んでいる。一番、仲がいいのは、この為だ。しかも、子どもの頃からだった。早い話が、幼なじみだった訳。よくある話だ。

でも、大きくなるにつれ、いろいろと変わってきた。僕は自分で、どの程度変わったのかわからない。いろいろと変わったのだろうが、それを言える程自信がない。それにこの話に、それは関係ない、僕が言いたいのは僕と一緒に育ってきた、新見が変わった、ということだ。子どもの頃から比べれば、変わってくるのも当然の話だが、昔は無邪気に遊んでばかりだった、新見が……というような事をつい最近あいつが言ったんだ。ほんとに昔は、公園の砂場で落とし穴を作って叱られて……、寺の裏の山へ行ったらセミをつかまえては……にがして、おしっこをひっかけられた事もあったし。

(注) 例1について……原文縦書き。表記については収録文集の通りである。

(例1)に見られる「そりゃあ、友達なんて、たくさんいるが」「幼なじみだった訳(わけ)」「新見が……というような事をつい最近あいつが言ったんだ」というような語り口は、通常の一人称で語られる文体の小説などと比べてもさらに口語的、日常語的な語調である。いっぽう「事(こと)」「為(ため)」「訳(わけ)」「程(ほど)」などが漢字で書かれているところは妙にアンバランスな感じもする。「書きたい」生徒だけに目から入るさまざまな文章の影響を無批判に受けたり、またワープロなどの影響もあるのかもしれない。

創作コンクールに応募しようなどという生徒の場合、このような文体はある程度意図的に用いるのだろうし、書かれた文章もそれなりに完成されたものになっている。しかし、そのような意図抜きに、文章を構成するなどという意識もなく思いつくままに書き足し、書き足していった、いわば交換日記の延長のような作文を見ることも多い。(例2)はある男子生徒が米国留学の許可を願い学校に提出した文章である。

(例2 「留学の目的」 高2男子)

私がアメリカへ留学したいというのは、自分自身のための将来の夢のためであるが、その他にも十代の若いうちに、日本文化以外の異国文化に自分の手(一字不明)で感じとり、将来の自分のため、人のために役立つようなことにも感心があったからだ。

夢というのは、自分が子供の頃から思い続けていて、今なお続いている科学者への道である。

科学者などと言うと、なに非現実的なこと言ってるんだもっと現実的に考えと言われてしまいそうだが、私自身懸命になりながら本当になりたいと思っているのだ。だからそのためには、日本の大学よりアメリカの大学に入学して自分のしたいと思っていることを__て勉強にはげみ、自分自身子供の頃思った科学者になりたいのである。

長たらしくなったが、その近道は、頭の柔らかい十代後半のうちにアメリカ（異文化に接れ）に行き、英語そのものの学力向上もあるが、それ以上の何か自分のものにしてこようというのであるから、私はアメリカへ留学することを望んでいるのです。

（注）例 2 について……原文は B 5 版レポート用紙に鉛筆で横書き。表記（誤字・脱字には下線を引いた）、ことばの言い回し等については原文通り。

留学として正規に認められるか——認められればアメリカで取った単位も日本の高校で取ったものと同じように扱われ通常の年限で卒業できる——休学扱いになるかの判定の資料として提出を求められ書いたもので、我々の感覚からいえばかなりあらたまって書かれなければならないものである。ここにあるのは、将来科学者になりたい、そのためにアメリカの大学に入学したい、「頭の柔らかい十代のうちに」異文化に接したい、という主張ではあるが、その 3 点の間に論理的なつながりはほとんどなく、留学したいという気持はあっても、科学者になるためになぜ留学が必要なのか、異文化との接触をなぜ望むのかということなどに必然性を感じることはできない。文章を書く上で、どのように訴えれば効果的かと考え構成するという意識はほとんどなく、心に浮かぶことを思いつくままに並べたという感じだ。「科学者などというとなに非現実的なこと言ってるんだもっと現実的に考えろと言われてしまいそうだが」という引用のしかた、「長たらしくなったが」ということばなどは話したことばをそのまま書いている。また、この文章には誤字・脱字・同じような言い回しの重複・主述の対応の不備などがそのまま残っているところから見て、推敲もされていないと考えられる。B 5 版の横罫紙にほとんどなぐり書きに近く、走り書きされたこの文章を読んだとき、筆者は、この生徒の意志はともかく、留学に耐え得る能力があるかどうかを疑った。しかし、ともに報告された学業成績は決して悪いものでなく、彼はめでたく留学が認められてアメリカへと旅立ったのである。

考えてみれば、生徒たちのこのような文章は日常的な友人間の手紙・交換日記

・メモなどの延長上にあるともいえるし、そうであるならば、さきに上げたような文体上の特徴、我々の眼から見て文章上の欠陥と思われるようなものは、特に珍しいものとはいえないだろう。文章といえしゃちほこばって、手紙文例集にでもあるような形式的なもののしか書けないというような人と比べてみれば、若者たちはずっと自由にのびやかに文章を書いているともいえる。しかし、それでも、自分の留学の審査を願い出るというあらたまった立場で、このような文章しか書けないということは問題と言わざるを得ない。そして、与えられた課題、与えられた時間、与えられた字数で形も内容も整った文章を書けないということが、やがて生徒たち自身の悩みともなっていく。

現在の大学・短大の特に推薦入学者の選考には面接などと並んで、小論文が資料として重きをなしていることが多い。およそ1時間程度で、与えられた題目について800字程度の文章を書かせるというのが最も一般的である。題目としては「志望の動機」「高校生活において印象に残ったこと」とか、専攻しようとする分野にかかわるような社会的問題について論評させるものが多い。これらは、生徒たちにとって決して無縁、無関心な問題ではないはずなのだが、多くの生徒にとっては小論文は最大の悩みの種となっている。そこで国語教師は推薦入学選考の始まる秋口から、正規の授業以外の小論文指導に追われることになる。

次にあげるのは、筆者が本年（'88年）5～7月に勤務する高校で行った課外の小論文講座での指導例である。（例3）は多数あげた題目の例から各自最も興味のある題材をとり上げて書くようにという指示に基づいてある高3男子が書いた文章である。

（例3）

学校と校則について

近ごろ、学校の校則のことなどでテレビや新聞といった社会に話題を呼んでいる。

その中には、男女間のことや言葉使いのことなどと言っためずらしい校則のある学校もある。

でも本来校則とは何のためにあるかと考えたことがありますか。みんながどう思っているかは知らないけど、ぼくは、学校が成り立って行くのに必要なものだと思います。そして、学校はその生徒一人一人の個性や自主性を伸ばし、豊かな心を育てるのがもっとうだとぼくは思います。

しかし現実には校則はそれらを養うためでもなく、生徒から自由をうばっているのではないのだろうか。

たしかに学校には数百人の生徒がいて、それらを指導し、学校内の組織や風紀を守るために校則が必要なのはわかるが、個性などにかかわる校則はなくしたほうがいいと思う。

ところで、服装については憲法の第21条には「言論・出版・表現などの自由」という項目があるがこれによると服装など自分の表現は自由で、制服のある学校は私服で行ってもおかしくないと思いませんか。

つまり自分は私服で学校に行きたいと表現した場合、だれも止めることはできない。

でも、これらのような考えを持った場合、学校は成り立たないだろう。

つまり校則は学校が成り立つ上で生徒の自由は最低限に守ってほしい。そして生徒は校則を守って、楽しい学校生活を楽しむことになると思います。

(注) 例3について…原文は400字詰原稿用紙2枚に鉛筆で縦書き。表記、段落、言い回し等については原文通り。なお、下線の「21」については原文も算用数字を用い一桁に「21」と書いている。

この文章の書き手は、勉強家というよりは行動派のタイプで、生徒会や学校行事の運営などにも積極的にかかわっていく中で、「個性や自主性を育てる学校を成り立たせる」「生徒から個性や自由を奪う」という校則のもつ背反性に気づいたのだと思われる。その視点は高校生としてすぐれたものだと思うが、それを文章の中で自分の一つの見解に達するまでに深め、主張しようという意志の現れがなく、ただ思いつくままに並べて、最後は考えが深まらないまま、適当に締めくくってしまったという感じである。いいかえれば、彼の中に小論文とは何で

あるのか、何を主張しようかという意識がほとんどないままに書かれている。さらに表現上の技法・技術の面にも主張を十分に生かそうという配慮や知識が欠けている。講座を受けている生徒たちに一言以上ということで論評させた数々の指摘を整理した上で、以上のような批評をこの文章に加えた。生徒たちに論評させたのは、彼らが文章を書きあげたあと、それを検証し、推敲するという習慣を持たず、他者の文章についても文章表現上の視点から見るといような習慣を持たないからである。このとき生徒たちは、「ですます調とである調の無意味な混淆」「段落の用い方の不適切さ」「『社会に話題を呼んでいる』『めずらしい校則』と例示されている内容が具体的でなくイメージがつかみにくい」「呼びかけ語句が耳に障る」等々の批評をした。

次に批評を踏まえ、より明確に主張するにはどのように文章を構成したらよいかということで、一つの例として（資料１）のような構成の型を提示し、これを参考に再度同一のテーマで全員に小論文作製を課してみた。このときに同じ生徒によって書かれたのが（例４）である。

（資料１）

例文の構成

- | | | |
|--|---|----|
| <ul style="list-style-type: none"> ● マスコミで、校則のきびしさが、話題になっている。 ● 個人的な生活に踏みこむ校則 ● きびしすぎる校則 ● 「あたりまえ」なことまで規定した校則 | } | 提示 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 「校則」と「学校本来の意義」の背反性 ● 「校則」 ● 集団生活を成り立たせていくための統制・秩序の維持に必要 ● 「学校本来の意義」 ● 学ぶことにより、個性・自主性を伸ばす | } | 分析 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 「学校本来の意義」を侵すような「校則」
（例） ● 「学校本来の意義」を成立させる「校則」の範囲はどこまでか。 | } | 主張 |

- 「学校本来の意義」の成立を侵す「校則」の存在に対して、どう対処していくか。

(例4)

学校と校則について

ついこの間、新聞に学校の校則についての記事が載っていた。その記事の内容は、中学の校則が厳しすぎるので見直しすることになったという記事です。例えば、ある中学校の校則には「他のクラスの教室に入ることを禁じます」というのがある。これは生徒同志の自由な交流の機会を制限することにならないかと書いてあった。たしかにそう思う。なぜなら、生徒一人一人の個性や自主性を伸ばし、豊かな心を育てるのが学校であり、それを成り立たせるのが校則だと思うから。

また、校則についての生徒の意見も載っていた。そこには、校則についての生徒の質問に対して、先生は、「くだらないことを言って」という感想をもらしたらしく、私たちが守る校則を、私たちが考えてみるのが悪いと思うのだろうかと言っている。これも生徒の意見は正しいと思う。なぜなら、自分たちで守っていく校則だから、生徒自身が理解するのは当然である。

今までの2つの事柄から学校は校則によって生徒の自由を制限し、先生自身が校則を把握してない所もあるみたいだ。こんなことだったら校則はないほうがいい。

もし校則がないとすると学校生活は自由気ままな毎日になり、生徒を指導し、統率するのは困難になるかもしれない。

でも、一概にそうとは言えない、校則がない中で、自分の力で善悪を判断し、正しい学校生活を考えるのではないかと思います。

校則は学校にとって必要かもしれないが、いきすぎた校則は排除すべきだ。また、出来るだけ校則のない方が、生徒の個性や自主性を伸ばすだろう。

(注) 例 4 について……原文は 400 字詰原稿用紙 2 枚に鉛筆で縦書き。表記、段落、言い回し等については原文通り。

実際にはこの生徒は（資料 1）の構成例をそのまま使ったのではなく、自分なりの消化をした上で書き直している。批評の中では、「例を具体的に示す」ことに努力が払われ、彼が批判したいと考える校則がどのようなものかということがかなり明確になっている。文体もほぼ「である」調に統一され、また後半息切れしてしまっただが、段落についてもきちんと設定しようとする意識は現れてきた。おもしろいのは、例を具体的に示していく中で、最初の文章（例 3）にあったような校則は「学校が成り立っていくのに必要なものだ」という気持が後退し、書き直した文章では校則の持つ背反性について論じるというよりは、校則否定論的な色合いが強くなっていることだ。これは文章に書こうと整理していく中で自分の主張が明確になってきたのだととらえてよいと思う。そうすると最初に「耳に障った」呼びかけ語句「～と思いませんか」も実は書き手の自信のなさの現れであったのかもしれない。

以上は筆者の拙い実践経験のほんの一端をご報告したのであるが、このような経験を重ねた上で思うのは、生徒たちが十年以上もの学校生活を経ているながら、文章表現をするという点については、ほとんど独学をしてきたと言ってもよいほど教えられてきていない、ということである。もちろん知識として、原稿用紙の使い方、段落の設定、文体の統一、主述の対応など文体上の知識、表記のことなど教えられていないわけではないのだろうが、それらを実際に文章を書き、批評される中で、自分のうちに定着させるということは小学校でも中学校でもほとんどされていないのではないかと。筆者自身、小学校 4 年の娘を持っているが、この子が学校から与えられる課題用の作文用紙は縦罫の更紙がほとんどで、罫目の原稿用紙を使っての作文は大きな行事の後の感想文など、年に数回程度だ。これだと改行一字さげとか句読点表記などはかなりいい加減ですんでしまい、きちんとした論理的構成によって主張をするというような文章意識は育ちにくいのではないと思われる。書いた文章への批評も題材のおもしろさ、ことばのえらび方

のユニークなことなどが高く評価される反面、誤字や文法上、文体上の不適切さなどが指摘されない場合が多い。自由な表現意欲を失わせないための配慮ということなのだろうか。

文章内容とは直接には関係のないことではあるが、高校生を見ていると筆記具は、ほとんどの生徒が細身、もしくは超太目の、例外なく短いシャープ・ペンシルであるし、握り鉛筆とでもいうべきか、親指を人指指、中指の外側にかぶせるようにして、鉛筆を垂直近く握りこむ持ち方の生徒が4～5人に1人の割合でいる。本人にして見れば持ちいいということなのであろうが、大量に書くという書き方にはどう見ても不向きな持ち方である。教育の初期の段階できちんとした持ち方を教えられていない。またその後、普通とは違う持ち方が発見された時点で個別にそれを直すような指導がなされていない。我々の子ども時代とは比較にならないほどの教科進度の速さに教師も余裕なく、子どもたちもついていけないという批判が現代教育に関してよくされるが、その弊害が、まさに鉛筆の持ち方や文章指導には現れているようだ。つめ込み教育や形式を重んじる教育を批判する立場から過度の文章指導や、鉛筆の持ち方までを統一的に教えることに反対する考え方もあるだろう。しかし、言語を使って表現する自由を獲得するために必要な基本的な知識・技法の習得は無視することはできないのではないか。

さて、そのようにして高校まできた生徒たちの教育を我々もきちんとやっているとは言い難い。1クラス48名の生徒を1人が5～6クラス（都立普通科の場合）担当する中で、担任を持ったりしていると、現実的には生徒に作文を書かせても読む時間を捻出することはむずかしい。もちろん書かせる時期をずらせるなどして、多少は作文指導もしようとは考えるのだが、それでも結局は机上に年がら年中作文の山を積み上げ暇さえあれば添削に追われるという状態になるし、そこまですべて、生徒の側から見れば十分な指導というにはほど遠い。選択講座などの形で文章指導の時間を設置しようとしても、講師時数の配分などの関係で1クラス20名程度でじっくりと文章を書かせ、読んでやりたいという国語教師としての願いは実現されるべくもない。また、多くの国語教師自身の中に文章指導に関する理念や、教育法が育っていないことから、指導が行きあたりばったりに行われているという現実もある。

それでも多少の助言で生徒たちの文章はかわっていく。論旨の明解な文章を書けるようになったとき、彼らは一段と深くものを見、理解するようになっていくことも感じる。それを楽しみに、あいかわらず小論文の添削と助言に追われる日々である。

以上は、1988年7月9日、「ことばを考える会」でご報告させていただいたものをもとにまとめた。